

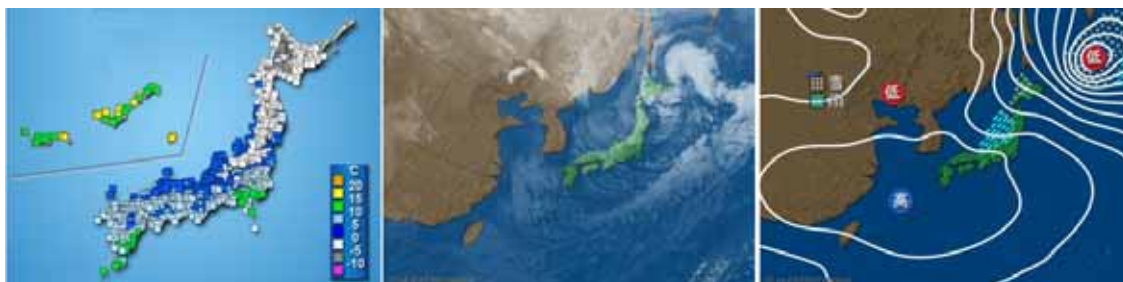
独思録：「気重の宴」(12/20)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

今年最大の寒波が押し寄せ、冬型の気圧配置が強まり、北日本から西日本にかけての日本海側では大雪となっているようです。

気象庁は、山形県鶴岡市櫛引では積雪が89センチに達し、12月の観測記録を更新したとか、北日本上空の寒気は日本の東海上に抜けるが、寒さは更に続く見通しで、降雪量は北陸で70センチ、東北日本海側と近畿北部で60センチ、北海道、岐阜県で50センチ、長野、群馬両県と山陰で30～40センチを記録する見通しだなどと言っています。



こういう寒い時には、やはり炬燵に入って、鍋を囲んでまず熱燗で一杯でしょうか。森鷗外に「余興」というエッセイがあります。季節は違いますが、

私は筵会（えんかい）の末座に就いた。若い芸者が徳利の尻を摘（つ）まんで、私の膳の向うに来た。そして猪口（ちよく）を出した私の顔を見て云った。

「面白かったですよ」

大人か小児（こども）に物を言うような口吻（こうぶん）である。美しい目は軽侮、憐憫（れんみん）、嘲罵（ちょうば）、翻弄（ほんろう）と云うような、あらゆる感情を湛（た）えて、異様に赫（かがや）いている。

私は覚え猪口を持った手を引っ込めた。私の自尊心が余り甚（はなは）だしく傷（きず）けられたので、私の手は殆（ほとん）ど反射的にこの女の持った徳利を避けたのである。

「あら。どうなすったの」

女の目に映じているのは、前に異なった感情である。それを分析したら、怪訝（かいが）が五分に厭嫌（えんけん）が五分であろう。秋水のかたり物に拍手した私は女の理解する人間であったのに、猪口の手を引いた私は、忽（たちま）ち女の理解すること能（あたわ）わざる人間となったのである。

という下りで宴会は始まっています。

暫（しばら）くして畑の後輩で、やはり幹事に当たっている男が、我々を余興の席へ案内した。

余興の席は廊下伝いに往く別室であった。

浪花節が始まった。一同謹んで拝聴する。私も隅の方に小さくなって拝聴する。信仰の

ない私には、どうも聞き慣れぬ漢語や、新しい詩人の用いるような新しい手爾遠波（てにをは）が耳障（みみざわり）になってならない。それに私を苦めることが、秋水のかたり物に劣らぬのは、婆あさんの三味線である。この伴奏は、幸にして無頓著な聴官を有している私の耳をさえ、緩急を誤ったりリズムと猛烈な雑音とで責めさいなむのである。

私は幾度（いくたび）か席を逃れようとした。しかし先輩に対する敬意を忘れてはならぬと思うので、私は死を決して堅坐していた。今でも私はその時の殊勝な態度を顧みて、満足に思っている。

この余興というのは、今で言うカラオケでしょうか。

今では、伴奏は、プロの奏者が弾いた録音で、苦痛はせいぜい歌い手の下手さだけです。当時は、下手な歌い手と下手な伴奏者によるカラオケを聴かされるための席に坐られ、さぞかし鷗外先生、苦痛の極みだったのでしょうか。

今年は不景気のため、会社の事務机に缶ビールや缶チューハイを並べ、ちょっとしたコンビニの惣菜を肴にして開く忘年会の話もあるそうで、鷗外先生の余興での苦痛などは小さい小さいということでしょうね。

特に、期待して国民は政権交代を選びました。しかし、鳩山首相は、マニフェスト（政権公約）の修正について「国民の思いや経済状況の変化に応じた柔軟性というものも重要だ」と述べ、党の要望を反映して修正を進めることに、柔軟な姿勢を示したり、「国民に対し暫定税率を廃止すべきだと申し上げてきた。ある意味で誓いだ」と記者団に語るなど、日によって言うことが揺ぎ、小沢幹事長との信頼も揺ぎ始めています。

鷗外先生言葉を借りて、言えば、

「まあ、首相はなんと云う未練な、いく地のない人間だろう。今首相と相対しているのは国民だ。」「幹事長の背後に潜むものは何か、首相は決断から逃げているのだとマスコミが思ったのが、どうしたと云うのだ。そう思うなら、そう思わせて置くが好いではないか。」

「天下に一人のそれを理解してくれる人がなくなつて、首相はそれに安んじなくてはならない。」と云ってでも「首相は決断を下せ。」

となります。



< 森鷗外 (1862-1922) >

明治・大正期の夏目漱石と並ぶ文豪。陸軍軍医、石見国津和野（現・島根県津和野町）出身。本名・森林太郎。東京帝国大学医学部卒業。第一次世界大戦以降、



大学卒業後、陸軍軍医になり、陸軍省派遣留学生としてドイツで4年過ごし、帰国後、自ら文芸雑誌『しがらみ草紙』を創刊して文筆活動に入ったが、その後、軍医総監（中将相当）となり、一時期創作活動から遠ざかったが、『スバル』創刊後に『モタ・セクスアリス』『雁』などを執筆し文筆活動に戻った。

乃木希典の殉死に影響されて『興津弥五右衛門の遺書』を書いている。

なお、帝室博物館（現在の東京国立博物館、奈良国立博物館、京都国立博物館）総長や帝国美術院（現日本芸術院）初代院長なども歴任した。

著作に歴史小説『阿部一族』『高瀬舟』、史伝『渋江抽斎』、訳詩編『於母影』、小説『舞姫』、翻訳『即興詩人』など多数。

街歩き・散歩：「師走の浅草、“愛食”でランデブー！」(12/15)

マスター、「本物への愛」とは何ですか？ 教えてください

「開店してもう半世紀近くになりますねえ」。オーナー兼マスターの蒔田昌二さんは、感慨深げに店と街の変遷を振り返る。

フラミンゴは蒔田さんが 25 歳のときに開いた店だ。当初はごく普通の喫茶店だったが、時流に乗ってジャズをかけ始める。ジャズ喫茶は、60 年代に隆盛を極めた日本特有の文化。やがて蒔田さんは本格的なジャズを聴かせる喫茶店をつくろうと思い立つ。自宅だった店舗の 2 階を改装してジャズ喫茶に。が、流行は下火を迎えるもの。次第にジャズ喫茶から人々が離れていく。そこで蒔田さんは、2 階をさらにバーに変えた。

「客足が思わしくない時は、ジョニー・ウォーカーをタダ同然で出したりもしましたよ。けどね、それだと無茶呑みして大騒ぎする連中が集まるだけの店になってしまうんです。一日の終わりに大人が、大切な自分の時間を過ごせる場。そういう空間にしなければと思ひましてね」

若いときから好きで通い詰めたオーセンティックなバーをイメージし、“贅沢な時間が流れる空間”を追求した。ほかの店なら 12 席はとれるカウンターを 9 席に。心地よい“間合い”を演出する。名演奏を豊かな音で再現するのは、最高級のオーディオセット。特注のスピーカーで通を唸らせる音質を実現した。

<http://waga.nikkei.co.jp/play/walk.aspx?i=MMWAd4000009122009&page=2>

<喫茶 バー・フラミンゴ>

東京都台東区西浅草 2-1-11。東京メトロまたは都営地下鉄浅草駅から徒歩 7 分、東京メトロ田原町駅から徒歩 5 分。

バーは、モルトウイスキーとカクテルが中心。日本酒や焼酎は置かない。

カフェは壁を緑に。「見た目が冬温かく、夏涼しげだから」というマスターのこだわり。イタリアの美術館を訪れたとき、そのように感じたのがきっかけだそう。

建物の右端にある扉を開けると、2 階のバーへ続く階段が現れる。



カウンターの向こうでシェーカーを振る姿が絵になる蒔田さん

天声人語：「食卓にたつ湯気」(12/19)

ご時世だから年中出回ってはいるが、大根はやはり吐く息が白くなる頃からがうまい。ブリ大根も、おでん種もいい。スポンジさながらに、どんな味も体に染みわたらせる得意技で、冬の食卓をにぎわせる。

風呂吹きは大根が堂々の主役になる。裏に十文字の隠し包丁を入れ、昆布を敷いた鍋で煮る。急(せ)かずに弱火でゆっくり時間をかける。風呂吹や忙は心を亡(ほろ)ぼすと森澄雄。湯上がりのような大根を、ふうふう吹きながら口に運べば、師走の寒波もしのげそうだ。

借りて耕しているわが菜園で、今年も大根が穫(と)れ盛りになった。冬野菜というのは、暑い季節にはすぐに育ってしまい、風味が薄く水っぽいのだという。冬の畑でじりじり育ち、土の滋養をたっぷり取り込んでこそおいしくなると、以前に紙面で読んだことがある。

青首をつかんで引っ張ると、意外なほどに簡単に抜ける。水をかけてタワシで洗えば、まぶしいばかりに白く輝く。そういえば 大根を洗ふ門(かど)には冬来(きた)ると、「笑う門には福来る」をもじって詠んだ江戸川柳もあった。

同じ江戸の 五月女(さおとめ)のしまわぬうちは土大根 は、田植えをする女性の足を泥つき大根に見立てた。白菜が赤帯しめて店先にうっぶんうっぶん肩を並べると俵万智さんにうたわれた白菜とともに、艶(つや)っぽい冬野菜の双璧(そうへき)でもある。

寒波は週末がピークらしい。夜ふけに音もなく降りだした雪で、けさ起きたら銀世界という方もおられよう。こんな日は、食卓にたつ湯気そのものがごちそうになる。さて、大根の出番となるか。

< 森澄雄 (1919-) >

俳人。本名森澄夫。日本芸術院会員。長崎県長崎市出身(日本現代人名録)。九州帝国大学法文学部卒業。

高等商業在学中から加藤楸邨に師事し、1940年「寒雷」創刊に参加。1954年第一句集『雪礫』を刊行、1970年句誌『杉』を創刊、主宰となる。1977年『鯉素』で読売文学賞受賞。87年、『四遠』で蛇笏賞受賞。



妻に対する愛情や夫婦のきずななど、日常生活に基づいた句が多い。読売俳壇選者。句に登場する固有名詞を観光案内のように細かく説明する独特の選評をする。

著作に『花眼』『浮鷗』『游方』『俳句遊心』『淡海』『空艦』『俳句遊想』『俳句と遊行』『詩の真実 俳句実作作法』など多数。

編集手帳：「気の重い季節」(12/19)

俳優の芥川比呂志さんは酒が入ると少々からむ癖があったらしい。その人がいると知らず、小沢昭一さんがすし屋に入ったところ、すでに酩酊（めいてい）して目の据わった芥川さんが「おいっ、小沢ッ、昭一ッ」と、いきなり怒鳴（どな）った。

小沢さんは間髪入れず、「芥川比呂志、ばんざぁいッ、ばんざぁいッ…」万歳を唱えながら店を出たと、劇作家の大西信行さんが随筆に書いている。難を逃れるための、これも芸だろう。

忘年会のシーズンも終盤を迎える。からみ癖のある上司や同僚が職場にいる人には、気の重い季節かも知れない。

不況下、会社の会議室などを使った簡素な忘年会が人気を呼んでいると、何日か前の本紙（東京版）にあった。いささか解放感には欠けても、1人3000円ほどで済む負担の軽さに加え、場所柄ゆえの節度とたしなみが保たれるとすれば、数少ない不況の功德と言えなくもない。

歌人の篠弘さんに一首がある。酩酊のポーズをとりし背の芯に浴びせられたる声を忘れず。何かと心のささくれ立つことの多いご時世、怨念（おんねん）を忘れない“忘年会”にならぬよう、いつにも増して用心がいる。

< 芥川比呂志 (1920-1981) >

俳優、演出家。東京都北区田端出身。作家・芥川龍之介の長男。慶應義塾大学文学部卒業。

中学・高校時代からシングや岸田國士の戯曲を読み、15歳のとき『お察しください (A Comedy)』と題する戯曲を桐陰会雑誌に発表。

戦後、長岡輝子、加藤道夫、加藤治子らと共に「麦の会」を結成。後に「麦の会」は文学座に合流し、以来文学座の中心俳優として、また、演出家として大成する。

特に1955年の『ハムレット』の主演は、今なお伝説として演劇史に語り継がれているほどの絶賛を博す。

舞台の他、ラジオドラマ・ナレーション・映画・テレビなどにも数多く出演。俳優業の傍ら、演出家としての才能も発揮し、1974年、『スカパンの悪だくみ』の演出で芸術選奨文部大臣賞、泉鏡花の戯曲『海神別荘』の演出で芸術祭優秀賞を受賞。



< 小沢昭一 (1929-) >

俳優、俳人（俳号・変哲）、エッセイスト、芸能研究者。劇団「しゃぼん玉座」主宰。東京市下谷根岸に生まれ。早稲田大学文学部卒業。

大学在学中に俳優座付属俳優養成所の二期生となり、千田是也に師事。1960年には演出家の早野寿郎と「劇団俳優小劇場」を結成。1966年に新劇寄席『とら』で芸術祭奨励賞受賞。



映画俳優としては、早稲田の同窓である今村昌平の紹介で、映画デビュー、200本以上の映画に出演している。

不惑の年に「芸能の原点」を求めて日本の伝統的な芸能に憧れを抱き、著書『私は河原乞食・考』を刊行。また、俳人として永六輔、江國滋酔郎らと共に「やなぎ句会」を発足。句集など俳句関連の出版物もある。

著作に『私は河原乞食・考』『陰学探険』『私のための芸能野史』『珍奇絶倫』『日本の放浪芸』『雑談につぼん色里誌』など多数。

酒に唄えば：「キウイの気持ち」(12/4)

落語本ばやりとはいうけれど、立川談志一門の立川キウイさんの「万年前座」(新潮社)にはたまげた。<桃栗3年柿8年キウイは前座を16年>。ヘンテコな高座名、あほらしくて、あほらしくて、師匠へのいちずなラブにちょっぴり泣けて。

「美弥」で飲んでいる。銀座は泰明小そばのビル地下にあるバー。カウンター向こうのバーテンがキウイさん。「師匠にマスターをスケて(助けて)やってくれと命じられまして。かれこれ18年です」。とぼけた味、ようやく二つ目に昇進したものの、落語界一の落ちこぼれがいきなり物書きデビュー。「いやあ、太宰治生誕100年ですからね。恐れ入ります」

たまたま発売日で、本屋で師匠の本の横に平積みされているのを見つけて興奮していた。「どこまでも付いていく運命なんですかね」。キウイならぬみそキュウリをつまんで振り返ると、隅っこのテーブルに赤いジャケットで赤ら顔の談志さん。弟子のお祝い? そんな雰囲気じゃない。「もう1本、人生最後のビールをくれ!」。マスターはしょうがないねえみたいな顔して栓を抜く。

本の末尾に談志さんの言葉があった。<放っとけ放っとけ別に死にやしない>。一流のテレを含んで、これほど温かい師の声はない。そして棚に並ぶ三遊亭円楽さん、月の家円鏡(橘家円蔵)さんら年季の入ったボトルが尻をたたいている。ちゃっちゃら すちゃらら すっちゃっちゃっ……。どこからともなく「笑点」のテーマも聞こえてきそうだった。「初代の司会者が師匠でした」

休養宣言しながらも夜の銀座で遊ぶ師匠、破門されても破門されても懲りない弟子、いい師弟じゃないの。(鈴木琢磨)

<鈴木琢磨(1959-)>

滋賀県大津市生まれ。

いまや絶滅した「探訪記者」の生き残り。サンデー毎日記者時代から北朝鮮問題にこだわる。

日本中の穴場の焼き肉屋をめぐり、1970~80年代の韓国歌謡にひたるのが至福のときという。現在、毎日新聞夕刊編集部編集委員、TBSテレビ「みのもんたの朝ズバッ!」のコメンテーター。

著書に「金正日と高英姫」などがある。

